

<金融史パネル>

日本におけるリレーションシップ・バンキングの展開—機関銀行と合本銀行

法政大学 靄見誠良

現代金融においてリレーションシップ・バンキングが脚光を浴びている。リレーションシップ・バンキングかトランザクション・バンキングか、ひとたび歴史を遡ると多様な論点が浮かび上がってくる(靄見(2016))。本報告の目的はリレーションシップ・バンキングの観点から近代日本の銀行の意義を見直すところにある。

リレーションシップ・バンキングの展開において最初の転回点は、預金銀行化である。この点についての欧米における先行研究として、アメリカ Lamoreaux (1994)とイギリス Collins & Baker(2003)がある。Lamoreaux は 18 世紀から 19 世紀にかけてニューイングランドにおいて、産業資本家が銀行家を兼ね、銀行貸出はインサイダーレンディングであった点を明らかにした。それはさしずめ日本において加藤(1956)が提起した機関銀行論のアメリカ版といえよう。加藤が 1920 年代日本の銀行が不安定であったのは機関銀行だったからと否定的だったのに対して、Lamoreaux はインサイダー貸出がニューイングランドの成長を牽引し、しかも安定的であったと積極的に評価した。問題は、預金銀行化途上の銀行システムのあり方にある。銀行の利害関係ネットワークはどのようなものであったか、またその経営は不安定であったろうか。

日本において預金化率は、第一次大戦頃まで 5、6 割近辺にあり、自己資本のウエイトが高かった。この事実を日本金融史の通説は、「前期的」「貸付会社」的と後ろ向きに評価する。しかし小銀行であっても 100 名を超える株主からなる株式銀行であった。預金が成長する前に株式資本というもう一つの源泉をとって社会的資本の集積が行われたのである。自己資本の一部は貸出に、一部は準備金に向けられる。部厚い自己資本が積極的な貸出を可能にし、同時に経営の安定性をもたらした。村、郡など地域の資産家を中心に株式によって広く資金が集められ、株主を中心に貸出が行われた。預金銀行化に向けて、預金と自己資本のバランスを如何にとるか、ここに経営の要諦があった。こうした経営行動は、地域の零細な資本を集めた「合本銀行」として積極的に評価されよう。英米では銀行の株式化と預金化とがほぼ同時に進んだのに対して、日本では銀行の株式化が預金化に先行した。ローカルな初期資本市場がそれを支えたのである。

本報告では、マクロデータ(大蔵省『銀行局年報』)とマイクロデータ(『銀行通信録』収録銀行決算広告)をもとに「合本銀行」の姿を浮き彫りにする。

参考文献:

加藤俊彦『本邦銀行史論』東京大学出版会 1957 年

靄見誠良「リレーションシップ・バンキングからトランザクション・バンキングへ: 理論歴史サーベイ」『地方金融史研究』第 47 号 全国地方銀行協会 2016 年